

学習者同士の対話を通じた文学の学び

—参加型授業実践報告

関 戸 冬 彦

はじめに

本稿は白鷗大学教養科目である「文学B」における授業実践を報告するものである。まず、授業の基本情報を概観した後、「教える」と「学ぶ」の違いを含め、授業を行うにあたっての環境づくりについて言及する。その後、実際の授業内容や実践について報告する。そして、それに対する学習者からの反応を検討し、効果や気づきについて述べたい。最後に、今後への課題やさらなる発展性についても触れる。

1 対話を促すための環境作り

最初に「文学B」とはどういう科目かを説明する。この科目は、3学部に開かれた教養科目であり、対象履修者は1～4年生なので、一言で言えば本学在学生であれば「誰でも」履修可能な科目である。内容は2で詳細に述べるが、英米文学を中心に、日本文学、そして文学作品を用いた教育などについても網羅した内容になっている。よって、この背景も学年もバラバラな学生たちにどうやって主体的な学びの場を提供しうるか。そこに執筆者は腐心したのであり、その過程と結果が本稿にて報告される。なお、開講時期は2019年度後期で、履修者数は約60名であった。

この科目は分類上からすると講義科目となる。それをそのまま履行するとなると、教員が講義、つまりは話をし、それを学習者、学生は聞く、となる。これはいわゆる一斉講義型の授業スタイルであるので、一見すると

普通な状態である。しかし、ただ「聞く」だけの90分を15回繰り返して学習者が身につくものは何なのだろうか、と若干批判的に問うてみると、知識の伝授は確かに出来るかもしれないが、その場で彼らはおそらくそんなに「考えて」はいないのではなかろうか。言い換えるなら、教員は何かを「教えて」いる(つもり)かもしれないが、学習者はそれをその場にてそんなに「学んで」いない可能性も幾ばくかありはしないだろうか、とも邪推できる。そこでまず、この「教える」と「学ぶ」の違いについて若干触れておきたい。

「教える」と「学ぶ」の違いは何だろうか。似ているようにも思えるが、「主語」が違う。「教える」の主語は教員、「学ぶ」の主語は学習者である。「人は教えられても学ばない」という言葉もあるように、「教えた」と思っていることをその通りに学習者が「学ぶ」のかどうかの保証は実はどこにもなく、「教える」側の思惑とは無関係なところで学習者はその一部を、場合によっては全てを、「学ぶ」可能性があるだけ、とも言えるだろう。そしてその可能性を少しでも広げようと思ったら、そこには学習者が主体的になるという積極的姿勢を養うことが大事で、その姿勢があつてこそ「学び」は多分に起きていくと考えられる。

こうした主体的な「学び」を可能にするために、「文学B」の授業ではチーム制を導入した。1チーム4人一組として編成、チームでの協働作業が多くし、一方的に教員の話聞くだけ、という時間を極力短くした。いわば、アクティブ・ラーニング的な学びあい、である。必要最低限のインプットないし情報、知識を提供したら、あとはそれらをどう駆使するか、どう考えるのか、のアウトプットを各自がグループ内でする。そのためには相手、あるいはグループの仲間、の話をちゃんと聴くという姿勢が養われていないといけないうし、学びへとつながらない。ここで「聞く」ではなく「聴く」とあえて漢字の表記をしたが、英語で言うとhearとlistenは違う。「(物理的に音声として何かが)聞こえている」と「(内容に興味

関心を持って) 聴いている」とでは全く違う。この「聴く」は「傾聴」とも言えるが、授業の最初ではこれをクラスルールとして徹底した。また、人は誰も肯定されたいはずで、何か発言した際に「おまえ、それちげーよ」とアタマごなしに否定されたら場の空気感が嫌悪になるのは明らかである。それを避けるためにもまずは相手の言うことを「聴く」。そして「うなづく」。異なる意見があるのなら、一旦受け止めた後で「こういう風にも考えられはしないかな？」と提案する。この姿勢を「肯定ファースト」⁽¹⁾と呼ぶ。よって、このグループ制と「肯定ファースト」の姿勢をもって、授業環境作りをした。

2 授業内容と実践報告

ではつぎに、実際の授業内容のいくつかに触れながら、上記の環境がいかに展開されていったのかを報告していく。15回の内容についてはシラバスを一部抜粋したものを巻末に添えてあるので必要に応じて参照されたい (Appendix 1)。

初回の授業では、上記の授業スタイルを説明し、グループにて簡単な傾聴の練習を体験的にしてもらった。具体的な流れは上記と若干重複するのでここではその練習についての詳細は省く。その後、より授業内容と関連する問い、「文学とは何か？」を投げかけた。まずは各自でこの問いに関する個々の見解や思いを小さいサイズのリフレクションペーパーにブレインストーミング的に書いてもらい、アウトプットする。そして先の4人1チームとなり、それぞれの考えを述べる。その際に注意すべきなのが「肯定ファースト」であり、いろんな考えを柔軟に吸収し、お互いの考えから学ぶ。また4人のうち1人はリーダー的役割を担い、場をファシリテ

(1) 「肯定ファースト」とは西條剛央が主宰する、エッセンシャル・マネジメント・スクールで学ぶ本質行動学のひとつである。これに関する文献はほとんどないのだが、西條剛央の著書でもある『チームの力』では「別の価値観を認める」(pp.192-193)として若干それに近い考えが紹介されている。

ターとしてうまくまわるように努めて振る舞う。各自の持ち時間は教室のスクリーンに教卓PCよりストップウォッチの画面を投影しており、適宜こちらでそれについてはアナウンスをして、順番に、かつなるべく持ち時間が均等になるように発表してもらった。なお、最初に、初めてのグループとしてこうした活動を行う際はいろんなことが極めて新鮮なのでよいのだが、授業の回数が重なってくるとやはり若干のマナー化感が出てしまうのは否めない。そのため、基本は初回の授業で決めた4人チームで着席、活動はするものの、その4人での1回だけではなく、必ずチーム替えをする。とはいえ、全員バラバラに好きなところで好きな人と一緒に、などとしてしまうと若干無秩序になり、教室内に混乱が起きるので、「リーダーはそのまま、ほかの3人は立って違う席に座るように。ただし、同じチームに先のチームのメンバーが2人以上入らないこと」というルールを設定し、毎回この活動の際にはアナウンスをした。これにより、毎回必ずチームメンバー以外の誰かとも意見交換、学びあいができるようにした。また、もちろん毎回全員が必ず出席しているということは60名近くも履修者がいれば難しく、また上級生は教育実習などの関係で休まざるをえない場合もあり、そうした際には臨機応変にチーム作りへの対応はした。具体的には、例えばその日2人ずつしかいないチームはくっついて4人に、ある3人チームをひとりずつにして同じく3人チームのところに入ってもらって4人とする、などのように、だ。それでもどうしても4人にならない、あるいは5人になってしまう、場合は持ち時間を調整するなどしてチーム内で協力して活動してもらった。なお、典型的な授業展開の進行は以下のものであった。

0:00-0:05 チェックイン(ペアで軽い話題、例えば「24時間以内にあったいい話」などで授業へのウォームアップ)

0:05-0:15 スライドを基にしながらかの前のレビュー(内容によってはこ

これからグループ活動が始まる)、今日のリーダーを決めてリアクションペーパーの配布など

0:15-0:30 グループによる発表（持ち時間は各自3分強程度）

0:30-0:50 グループ替え（席の移動、人数調整など）の後、グループによる発表 その2

0:50-0:55 元のグループに戻っての内容シェア

0:55-1:20 新規学習項目の説明、必要に応じて概略的講義、グループにて情報共有

1:20-1:30 リフレクションペーパーに今日の学びをふり返りとして記入、提出

こうしたスタイルをベースに、シラバスにあるコンテンツを毎回学んでもらった。イギリス文学（詩、小説、演劇）、アメリカ文学（詩、小説、演劇）、カズオ・イシグロの*The Remains of the Day*（『日の名残り』）、英語／文学教育、翻訳、比較文学、世界文学を毎回1テーマずつ取り上げ、オーソドックスな展開としては、詩人や作家の背景をその場でスマートフォンなどの情報端末を駆使して調べてメモを作り発表、共有する、その日学んだ作家の作品を次週までに読んでビブリオバトル形式⁽²⁾で内容を発表し、時間があれば各自のコメントを述べる、などだ。いわゆる知識的なことは最低限こちらから発信するものの、よほど専門的なこと以外はいまやスマートフォンで大抵は調べられる。むしろ、そうやって「自分で」積極的に調べたほうが情報をただ講義として聞くよりも印象に残りやすい。また、グループで共有するので自分がやらなければグループのメンバーが困るわけで、受け身の姿勢から脱却できる。こうした点は後に紹介するアンケートからも聞かれた声だった。

(2) ビブリオバトルとは本を読んで、内容とコメントを規定の時間内に発表する、知的読書ゲームである。詳細は<http://www.bibliobattle.jp/>を参照。

その中でも好評だった内容をふたつほど紹介する。まず、「シェイクスピアでアイデアバトル」である。これは第4回「イギリスの演劇、映画(時代と文化、英語表現)」にてシェイクスピアを取り上げた際の課題で、多々あるシェイクスピア作品の中からひとつ選び、それを現代風にリメイクするというアイデアを、あたかも映画監督、あるいは制作ディレクター的な目線から考え、発表するというものだ。この活動の意図は、ただ知識的に作品を学んだとしてもそれは一時的な記憶にすぎず、またどこか自分とは関係ない絵空事のようにしか思えない。ところが自分で「制作する」という立場に立つと、まずは内容を十分に理解しないとイケないし、その上で自分のテイストを加えようとするので必然的に読みや解釈の度合いが深くなる。よって、準備段階における学びにおいても各自の学びが自然と起こる。さらに、上記で紹介したグループ活動を行うことによっていろいろな作品の様々なリメイクに関するアイデアが得られるのと同時に、場合によっては自分が選んだ作品を誰かが違ったようにリメイクしている可能性もあり、そこで自分の考えてきたものとの対比が起こり、より興味が喚起される。

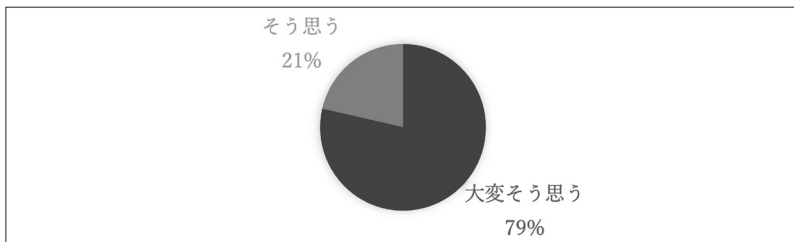
もうひとつは「教材アイデアバトル」である。これは第12回「英語で読まれる日本文学(翻訳と表現)」に含まれる活動のひとつで、これまでに授業で扱った文学作品を「教材」として扱うのであれば、どの学校(小中高)のどの学年に、どの教科(英語、国語、道徳など)でどんな授業展開にするのかに関するアイデアを考え、発表するというものであった。最初にも述べたようにこの科目は3学部共通であったので、教育学部の学生たち、中には実際に教育実習を経験したものも、いた。そのような背景や経験があると俄然、こうした活動にも力が入るようで、この授業の後のコメントでは「教育学部の人のアイデアや情熱に圧倒された」という声も聞かれた。このようなコメントや学びは、学部が合同で、かつ活動も学びあいのスタイルだからこそ生まれたものだろう。

また、評価にも関わるものだが、学びのまとめとしてのレポートは学期中盤と学期末と2回、書いてもらった。どちらもそれまでの授業で学んだトピックから2つ選び、A4用紙1枚を目安に1000字程度を2種類、計2枚2000字とした。基本的にトピックは各自で選んでもらったのだが、その意図はどのトピックにするか、というその出発点の段階から積極性と創造性を発揮してもらいたかったからである。そしてレポートも普段の授業と同様、書いてもらった後は授業内で読みあって学びあう。ただ教員に提出しさえすればよいというものではない。よって授業では、持ってきてもらったレポートをもとに「レポートバトル」を行ってもらった。これはレポートをもとにしたミニプレゼンテーションで、やり方は普段と同じ、各チームにて1回、その後チーム替えをしてもう1回、行った。さらに、レポートとしての完成度、フォーマットや参考文献の有無など、いくつかチェックすべきポイントをリスト化したレポートチェックリスト（Appendix 2）をA5両面印刷にして配布し、2人の読者からフィードバックをもらえるようにした。これにより、中盤の際には学期末に向けて、学期末の場合は最終提出の1回前に事前チェック的に行ったので提出前チェックとしても機能し、よりよいレポート作りを目指した指標となった。文学は学問の性質上、どうしても過去の文献を読まずして何か論考をする、というのはほぼ無理である。そうでないと、小学生の読書感想文と何ら差異がない。実はこの点はとても大切な点で、文学を「学」たらしめるものはいかに主観的な考えだけに陥らないか、という点にかかっている。そのためにも参考文献の探し方や引用の仕方、レポート内での引用と意見の分け方、についても必要に応じて説明をした。結果として、中盤のときはレポートすらどういふものかわかっていなかった受講者でも、期末の際にはそこから成長した姿があったようだった。

3 学習者からの反応

さて、このような参加型の授業を学習者たちはどのように受けとめ、感じていたのだろうか。その反応を知るべく、最終授業の際に授業内アンケート(Appendix 3)を実施した。5つの項目を選択式に、またそれぞれに自由記述欄を設けて回答してもらった。以下、それぞれの項目について検証する。なお、回答者数は56名であった。

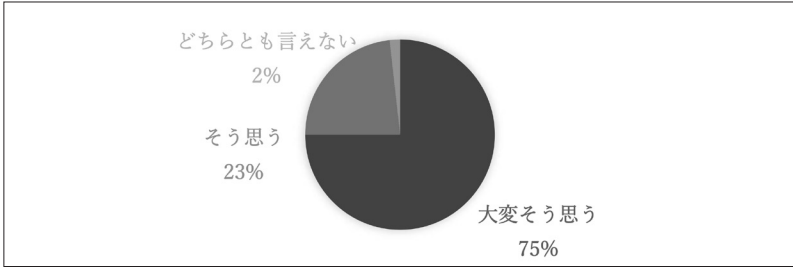
まず、1.「一斉授業型(講義形式)ではない参加型授業はあなたによって良かったと思いますか?」については、56名中44名が大変そう思う、12名がそう思う、と答えた。



どういう点がよかったかについては自由記述欄にあったコメントのいくつかを紹介する。「参加型の授業によって、コミュニケーション力も鍛えられ、意味のある学びができると思ったから」、「主体的に授業を受けることができた」、「一方的な授業ではないので、緊張感を持って授業に取り組めた」、など参加することで主体性が持てたという主旨の意見が多くみられた。中には「ひかえめな性格を直した自分にとってはとても有効的だった」、「私は4年生ですが、1年生と同じグループで活動してみて勉強できることもたくさんあったので良かったです」との声もあり、一斉講義を聞いているだけでは起きないであろう気づきや体験もあったようだ。また、「眠くならない」という声も複数あり、これは当然と言えば当然だが、グループで対話している最中に寝ている学生は誰一人いなかった。

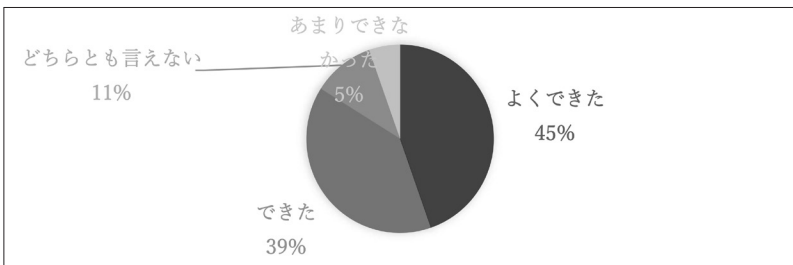
次に、2.「参加型授業は学びを効果的にする機会になったと思います

か?」について、56名中42名が大変そう思う、13名がそう思う、1名がどちらとも言えない、と答えた。



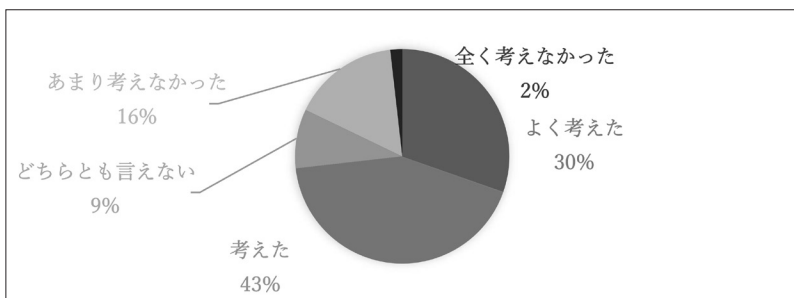
これに関しては、「グループで発表するので必ず予習しなければいけないという気持ちになり、勉強もはかどりました」、「自分の考えをまとめ、周りに共有することで、自分の学びを更に高められたと感じている」、「人に分かりやすく、自分の考えを伝えるということはとても難しいと思う。その難しいことを繰り返すことは、生徒にとって人間的にプラスになることだと思ったから」などの声があり、積極性や責任感が学びの背中を後押ししたような印象を受けた。そういう意味においては、本稿の1において「学習者が主体的になるという積極的姿勢を養うことが大事で、その姿勢があってこそ「学び」は多分に起きていく」と述べたことは立証されたと言ってよいだろう。

そして、3.「グループワークはうまくできたと感じますか?できた/できなかった理由も記入してください。」について、56名中25名がよくできた、22名ができた、6名がどちらとも言えない、3名があまりできなかった、と答えた。



上記2つの質問と比べるとこちらは答えに若干幅が出た。肯定的な意見としては、「グループで意見交換することで自分を客観視することができたし、リーダーとしても、一人の学生としてもうまくできた」「学年が異なる人、学部が違う人と組むこともあったため、人を知り合う場としても良かったと思う」など、グループへの感謝の言葉を綴ったようなコメントもあった。これらは多様な意見を聞くことでの学びや発見があったという意味だと受け取れる。その反面、「3分もたないことが多かった」、「もう少し意見を言えたら良かったなと反省」などのように、自己反省的なコメントもあった。これは自分の準備の質や量がグループへの貢献と比例すると考えたとすると、それが足りないと自覚した場合は結果として出来なかったと悔いるようなことになり、ゆえにできなかったとのやや否定的な答えになったのではとも考えられる。

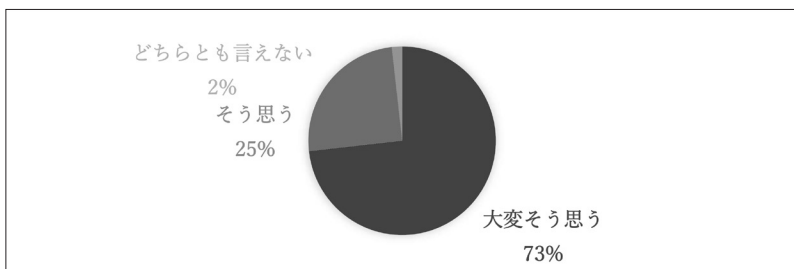
さらに、4.「授業以外でも科目のことやグループのことを考えましたか?」について、56名中44名がよく考えた、12名が考えた、5名がどちらとも言えない、9名があまり考えなかった、1名が全く考えなかった、と答えた。



考えたと答えた理由からいくつか取り上げると、「毎週課題があり、だんだんそれについて考えることが楽しくなったから」、「前準備がとても重要な科目だったので、ずっと頭のすみっこに居座っていました」といった授業自体に関するものもあれば、「本屋で、日本の小説だけでなく、世界

の小説にも目を向けるようになったから」、「国際関係論で「ヘミングウェイ」の名前がでた時、文学の授業で使えるのではないかと、メモをした」などのように授業中以外の何かと結びついたとの声もあった。やはり、グループ内での発表という課題が設定されていると、個人だけの問題ではなくチームにも影響が出るため、やらないわけにはいかないという心理が働いたのではないかと推測される。それが結果として学びを深めた契機となったのであれば、単に教員に提出すれば終わり、という課題よりも動機づけが高まった、あるいは良い意味でのプレッシャーとなった、のであろう。逆に、あまり考えなかった、全く考えなかった、の回答者からの自由記述は上記ほど数も内容も多くはなかったので理由の特定はやや難しいのだが、その中でもわずかにあったのは「授業中で済んだ」、「課題をやる時以外は考えなかった」、あるいは「他の活動や前半は就活があり考えられなかった」といったもので、個人の状況や関心の度合いによって授業時以外のことに関しては批判的に捉えていたのかもしれない。

最後に、5. 「振り返りやレポートを書くことで学びは深まったと思いますか？」について、56名中41名が大変そう思う、14名がそう思う、1名がどちらとも言えないと答えた。



「同じテーマでもレポートであらためて書くと違う発見等あって楽しかった」、「文字に打ち出すことで考えをよりまとめ、考えを深めることができたから」などレポートに対する声もあれば、「1日の振り返りはとても良かった。自分が今日何を学んだかを再認識できる」と授業毎のふり返

りに言及しているものもあった。あるいは、「考えをまとめ、整理する時間になった。またCiNiiでの論文検索はおもしろかった」と調べものに対することへの声もあった。こうした声から総合的に判断すると、授業を聞きっぱなしにするよりは、各々が授業内での活動や課題を通して、考え、まとめ、そして伝えるという作業は積極的な学びを生み出し、またそれに関与すればするほど内容への関わり方も深くなっていったように思える。

おわりに

本稿では、上記のように「文学B」の授業に関しての報告を行ってきた。まず、対話を促すための環境作りにおいては、「教える」と「学ぶ」の違いに基づき、主体的な学びの大切さを論じた。そしてグループ活動を円滑に進めるための前提としての「肯定ファースト」の姿勢を紹介した。つぎに、授業内容と実践報告にて実際に行った授業のアプローチや内容などを一部ではあるものの、典型的な授業時間配分含め、具体的な実践例を記しながら紹介した。特に「シェイクスピアでアイデアバトル」や「教材アイデアバトル」は好評であった。そして最後に、学習者からの反応としてアンケートに基づく学習者からの声を分析、紹介、そして検証した。アンケート結果の数、そしていくつかの自由記述内容からもわかるように、情報伝達的な一斉講義ではない、この対話を重視した授業スタイルは概ね学びの契機となり、また個々の思考の深化にもつながったと言える。

よって今後は好評であったこのスタイルを維持しつつ、より深い学びを起こすためにさらに出来ることは何なのかについても継続的に考え、可能な限り最新で最適なアプローチを導入しつつ、授業運営を行っていきたい。具体的には、いまやオンライン学習ツールがかなりの速度で浸透しつつあるので、そうしたツールを用いての双方向学習が出来たら、と思う。理想的には、授業後、あるいは授業前にも、グループでの活動が継続的に行われ、学びが日常化するとよいだろう。とはいえ、この「文学」は教養

科目であって学部の専門科目ではない。しかしだからと言ってそれによって重要度の高低が自ずと決まってくるというのもいささかおかしな話なので、そのバランスをどう取るか、あるいは連携することが出来るのであればそれはどのような内容や方法があるのか、これについては今後の課題としたい。最後に、今学期本授業「文学B」に参加してくれた履修学生全員に謝意を記し、本稿の結びとしたい。

参考文献

- 関戸冬彦（2019a）「主体的で対話的で深い学びを促す文学講義科目－「英語圏の文学」授業実践報告」『マテシス・ウニウエルサリス』第20巻2号、163-179.
- 関戸冬彦（2019b）「学習者の学びを活性化させるためのいくつかのアプローチありえる楽考式を参考に」『マテシス・ウニウエルサリス』第21巻1号、153-165.

（本学法学部准教授）

Appendix 1

文学B シラバス(抜粋)

授業の内容(主題):英語で書かれた代表的な文学(英米の小説、詩、演劇など)を通して、その作品における様々な英語表現を理解できるようになり、またその国や地域の文化についても理解を深めることを目的とします。具体的には英語で書かれた代表的な文学作品、シェイクスピアやカズオ・イシグロなど、を読みながら英語表現や文化を積極的に学んでいきます。なお、この科目は講義科目となっておりますが、教員側からの一方通行的講義ではありません。90分間ただ座って聞いているだけ、という授業はほとんどせず、参加者全員が主体的に学び、対話をし、その場で調べたりもします。

到達目標:文化・社会・政治的知識と関連づけながら、英語圏の文学・文化を鑑賞・分析し、批評できるようにする。

授業計画表:

- 第1回:イントロダクション 文学とは何か?
- 第2回:イギリスの小説(時代と文化、英語表現)
- 第3回:イギリスの詩(時代と文化、英語表現)
- 第4回:イギリスの演劇、映画(時代と文化、英語表現)
- 第5回:アメリカの小説(時代と文化、英語表現)
- 第6回:アメリカの詩(時代と文化、英語表現)
- 第7回:アメリカの演劇、映画(時代と文化、英語表現)
- 第8回:英米文学の特徴(まとめと中間報告)
- 第9回:カズオ・イシグロの世界(The Remains of the Day)
- 第10回:カズオ・イシグロの世界(The Remains of the Day)と英語表現
- 第11回:英米文学と日本(受容の歴史)
- 第12回:英語で読まれる日本文学(翻訳と表現)
- 第13回:英語で発信する日本文学(翻訳と英語表現)
- 第14回:世界文学、英米以外の英語圏文学の作品と英語表現
- 第15回:イギリス、アメリカ、日本、そして世界文学(まとめ)

評価の方法など:試験はしません。その代わりに、レポートが評価の重要な位置を占めます(1000字程度のレポートを数回書いてもらいます)。なお、3回以上理由なく欠席した場合は単位取得とはなりません。(レポート・課題 60%、受講態度 40%)

Appendix 2

文学 レポートチェックリスト

フォーマット

- 1 名前、学生番号、タイトルがあるか？(名前だけ後から手書きはNG)
- 2 文字の大きさが 10.5～12 くらいになっているか？
- 3 無駄に複数枚になっていないか？(ページの半分以上が白紙になっていないか？)
- 4 誤字、脱字はないか？(後から手書きで修正するのはNG。その場合は直して再度プリントアウトする)
- 5 「ですます」調と「である」調が混在していないか？
- 6 規定の字数(1000 語もしくは 400 words)をクリアしているか？(9割以上が常識の範囲。多い分にはこの授業ではかまいません)

____/6

内容

- 7 事実(史実)と自分の意見とがバランスよく入っているか？(5:5～6:4くらいが理想)
- 8 事実誤認(作家名や作品名など)をしていないか？
- 9 自分の意見に根拠はあるか？推測だけになっていないか？

____/3

参考文献

- 10 参考文献を載せているか？
- 11 誰が書いたのかわかる文献か？
- 12 本文中のどこが引用かはっきり示しているか？

____/3

Total

____/12

Comments (よかったところやもう少しこうしたらという部分があったら書いてあげましょう)

Checked by _____

Appendix 3

文学B 授業運営 アンケート

無記名でアンケートにご協力お願いいたします。当てはまるものに○をつけてください。枠内には答えの理由を記入してください。成績等には一切関係しません。また、この結果は英語教育の論文に掲載されることがありますので、ご了承ください。

1. 一斉授業型(講義形式)ではない参加型授業はあなたによって良かったと思いますか?

1 大変そう思う 2 そう思う 3 どちらとも言えない 4 そう思わない 5 全く思わない

2. 参加型授業は学びを効果的にする機会になったと思いますか?

1 大変そう思う 2 そう思う 3 どちらとも言えない 4 そう思わない 5 全く思わない

3. グループワークはうまくできたと感じますか? できた/できなかった理由も記入してください。

1 よくできた 2 できた 3 どちらとも言えない 4 あまりできなかった 5 全くできなかった

4. 授業以外にも科目のことやグループのことを考えましたか?

1 よく考えた 2 考えた 3 どちらとも言えない 4 あまり考えなかった 5 全く考えなかった

5. 振り返りやレポートを書くことで学びは深まったと思いますか?

1 大変そう思う 2 そう思う 3 どちらとも言えない 4 そう思わない 5 全く思わない

6. その他、コメントがあれば自由記入をお願いします(一番興味を持ったトピックとか)。

なお、この授業を履修した理由は

内容(文学)に興味があった・たまたま時間が空いていた・単位が必要だった・その他()